

ダニエル書 - 第一百七十五号

栄光のキリスト：ダニエル書と黙示録における預言的な並行関係

Jeff Pippenger

2024-04-05

ダニエル書10章におけるキリストの幻は、ヨハネが黙示録で見たものと同じ幻である。それは「marah」の幻で、キリストの現れを表す「mareh」という幻の女性形の表現である。

「mareh」は二千三百年の幻であり、その第一義の意味は「現れ」である。ダニエルとヨハネにおけるキリストの「現れ」は、いずれも栄光を受けたキリストの幻であった。

第一の月の二十四日、私は大河、すなわちヒツデケルのほとりにいた。そのとき、私は目を上げて見ると、亜麻布をまとい、腰にはウファズの純金の帯を締めていた一人の人がいた。彼の体は緑柱石のようで、顔は稲妻のような輝き、目は火のたいまつのように、腕と足は磨き上げた青銅のように輝き、その言葉の声は群衆の声のようであった。ダニエル書 10:4-6

「姿」を意味する語「mareh」は、その箇所では「稲妻のような姿」と訳されている。この語は第十章で4回用いられ、そのうち2回は「幻視」、2回は「姿」と訳されている。さらに、女性形でも3回用いられている。「marah」は「姿」の幻視を表す女性形の語である。これは「鏡」と定義され、それが見られたときに何かを生じさせる「使役的」な副詞である。

使役副詞とは、何かが起こるようにさせたり、効果を生じさせたりする形容詞から派生したものである。言語や文法では、しばしば、誰かや何かに動作をさせたり、状態を経験させたりするという考えを表す動詞や構文を指す。

例えば、「She made him laugh」という文では、動詞「made」は使役で、主語（she）が目的語（him）にその動作（笑うこと）を行わせたことを示している。

私は自分の車を修理してもらった。

彼女は自分の生徒たちに試験勉強をさせた。

彼は髪を切ってもらった。

会社はその建物を改修してもらった。

「私たちは子どもたちに家事を手伝わせるつもりだ。」（ここでは、主語「We」は、子どもたちに家事を手伝わせるつもりである。）これらの各例では、使役の動詞（had, made, got, get）は、主語が主動詞（repaired, study, cut, renovated, help）で示された行為を他者に行わせることを示している。

「姿」を表す「mareh」の幻は、女性形の「marah」では「鏡」と定義されており、栄光のキリストの幻が、その幻を仰ぎ見る者たちのうちに再現されることを示している。ダニエルがキリストの「姿」を稲妻のように見たとき、一群の人々は恐れて逃げ去ったが、

ダニエルにとっては、それが彼の内に奇跡的な変化をもたらした。

そして、私ダニエルだけがその幻を見た。私と一緒にいた人々はその幻を見なかったが、彼らの上に大いなる震えが臨み、身を隠そうとして逃げ去った。こうして私はひとり残され、この大いなる幻を見たが、私のうちには力がまったく残らなかった。私の威容は私のうちで損なわれ、私は力を保てなかった。ダニエル書 10:7、8。

真理は、ヘブライ語の「真理」を表す語によって象徴されており、その語はヘブライ語アルファベットの第一、十三、そして最後の文字によって構成されている。最初の文字と最後の文字は、キリストにおいて常に同一であり、アルファでありオメガである方として、つねに初めと終わりとを表している。中央、すなわち十三番目の文字は反逆を表している。ダニエルは「この幻を見たのは、ただ私ダニエルだけであった」と述べているが、ダニエルと共にいて、反逆のうちに生きていた者たちは、「この幻を見なかった」。それゆえ、ダニエル「だけ」が「その大いなる幻」を「見た」のである。初めにも終わりにも、幻を見たのはただダニエルだけであり、第二の言及は、逃げ去った者たちにその反逆を明らかにさせた。ダニエルは、キリストの御姿を見つめる過程を通してキリストのかたちへと変えられる終わりの日の神の民を表している。私たちは「鏡」の幻を見るべきである。

私たちは、実際の経験を通して神を知る知識を持たなければならない。もし私たちが主を知ることと求め続けるなら、主の現れは夜明けのように確かに備えられていることを知るだろう。キリストは、私たちが神の満ち満ちたものに満たされるようにと呼びかけておられる。そうすれば、私たちはキリスト教信仰の完全さを真に体験することができる。「わたしが与える水を飲む者はだれでも」と救い主は宣言される、「決して渇くことがない。だが、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへと湧き上がる水となる。」キリストは、私たちがご自分と共に働く同労者となることを望んでおられる。私たちが自己を空しくするとき、主は私たちに恵みを与え、他の人々に分かち与えさせてくださる。二本の金の管を通して自らのうちから黄金の油を注ぎ出す二本のオリーブの枝は、必ずや、清められた器に、必要としている人々のための光と慰めと希望と愛を供給するだろう。私たちは、気まぐれで断続的な奉仕以上のものを神にささげなければならない。しかしそれができるのは、イエスに学び、その柔和と心のへりくだりを大切にするときだけである。神のうちに身を隠そう。神に信頼しよう。キリストのうちにとどまろう。そうすれば私たちは皆、「おおいのない顔で、鏡に見るかのように主の栄光を仰ぎ見て、栄光から栄光へと-すなわち品性から品性へと-同じ姿に変えられていく」。神はあなたにも私にも、不可能なことを期待しておられるのではない。主を仰ぎ見るとき、私たちはそのかたちに変えられる。『Signs of the Times』1900年4月25日。

ダニエル書第十章および第九章において、ガブリエルは預言の外的幻と内的幻の解き明かしをダニエルに与えており、そして第十章第一節におけるダニエルの最初の言明は、彼が「その事」と「その幻」として表されている両方の幻について理解を得ていた、ということである。彼は、嘆きのうちにあった二十一日間の終わりに、その理解を受けた。その二十一日は、大天使ミカエルの到来をもって終結した。二百二十という数、ならびに二百二十の十分の一、すなわち十分の一税である二十二という数は、神性と人性の結合の象徴であり、そしてダニエルがキリストの像へと変えられたのは、第二十二日目のこ

とであった。

私は美味しい食物を食べず、肉もぶどう酒も口に入れず、またまったく身に油を塗ることもしなかった。三週間が満ちるまで。そして第一の月の二十四日、私は大いなる川、すなわちヒッデケルのほとりにいたとき、私は目を上げて見た。すると、亜麻布を身にまとい、腰にはウパズの純金の帯を締めているひとりの人がいた。ダニエル書 10:3-5。

ダニエルは、神の預言の御言葉を通して、自らが散らされていることを認識し、その散らされた状態を悲しみつつ光を求めている終わりの日の神の民を表している。彼らの散らされた状態は、エゼキエル書第三十七章において、死んだ枯れた骨の谷として描かれている。その骨は死んでおり、また散らされているが、それらはイスラエルの家であると示されている。終わりの日のイスラエルの家とは、十四万四千人である。彼らは、ダニエルがエレミヤとモーセの書を通して認識したように、散らされているのである。エゼキエルにおいて、「死んでいる」ということは、彼らが自らの状態を認識していることを示している。

それから彼は私に言った、「人の子よ、これらの骨はイスラエルの全家である。見よ、彼らはこう言っている、『我らの骨は干からび、我らの望みは失われ、我らは断られた』」。エゼキエル書 37:11。

骨に象徴されているイスラエルの家は、自分たちは「われらは各自の分において断たれている」と宣言する。彼らは自分たちが散らされた状態にあることを認識したのである。終わりの時のイスラエルの家は、十人の乙女のたとえを文字どおり成就し、ミラー派の歴史においては、自分たちが各自の分において断たれていることを認識したという成就が、賢い乙女たちが自分たちが遅延の時にあること、そしてその遅延の時がそのたとえの中の特定の期間であることを悟ったときに明確になった。エゼキエルにおいて自分たちの散らされた状態を認識する者たちは、第一の失望の後、自分たちが遅延の時にいることを認識した者たちである。

エゼキエルの骨と、十人の乙女のたとえに出てくる賢い乙女たちの双方は、二十一日間のダニエルの嘆きによって表されています。二十一日が過ぎ、二十二日目にミカエルが降りて来て、栄光のキリストの幻がダニエルに与えられ、ダニエルはキリストの似姿へと変えられました。賢い乙女たちと死んだ骨もまた、鏡の幻によって成し遂げられる変容を経なければなりません。

ダニエル、エゼキエルの枯れた骨、そしてミラー派の歴史における賢い乙女たちは、いずれも黙示録11章で殺される二人の証人と一致する。モーセとエリヤは殺されたが、象徴的な三日半の終わりに復活することになっていた。ユダの手紙に示されているように、モーセはミカエルによって復活させられた。

しかし大天使ミカエルは、悪魔と争い、モーセのからだのことで論争したときでさえ、彼をののしって訴えることはあえてせず、ただ「主があなたを戒められるように」と言った。ユダの手紙 1:9

ダニエル書第十章で、ダニエルは二十一日間の嘆きののちにミカエルが降臨したとき、鏡の幻視を受ける。死者をよみがえらせるのはミカエルの声である。

主ご自身が、号令と大天使の声と神のラッパの響きとともに、天から下って来られる。そして、キリストにある死者がまず最初によみがえる。テサロニケ人への第一の手紙4章16節。

ダニエル書第10章は、第三天使のラオデキア的運動から第三天使のフィラデルフィアの運動への移行を明らかにしている。これは、黙示録第11章の二人の証人、エゼキエル書第37章の干からびた骨、十人の乙女のたとえにおける賢い乙女たち、そしてそのたとえを成就したミラー派と一致している。ガブリエルは、第9章で始めた解釈の働きを仕上げながら、大いなる鏡の幻の解釈を与えた。その解釈は、第11章に見いだされ、実際には第12章の最初の三節にまで続いている預言的歴史をガブリエルが指し示すことによって成し遂げられた。そして第12章4節で、ダニエルは自分の書を封印するよう告げられる。

ダニエル書第十章では、「行に行を重ねて」、ダニエルは神の終末の民を表している。その民はダニエル書第二章でも、ネブカドネザルの秘密の獣の像によって表されている外的な預言的メッセージを理解しようと（死の脅威のもとで）熱心に求める者として表されている。彼はまた、二千三百日によって表されている内的な預言的メッセージの幻を理解しようともしている。第十章における象徴的な二十一日の嘆きの後、彼はついに両方の啓示を理解したものとして表される。大天使が降り、彼が三度触れられるとき、その理解は成し遂げられる。

彼がミカエルとともに持った経験、彼だけが見るミカエルの幻視は、預言の内的な幻視と外的な幻視の双方の完全な解釈を受け取るための備えとなる。その経験は、エゼキエル書三十七章、黙示録十一章、イザヤ書六章と組み合わせて読むと、行に行を重ねるように、非常に詳細に示されている。ガブリエルがその二つの幻視を結び合わせる十一章の該当箇所は十節であり、そこでは北の王が要塞にまで進むが、それ以上は進まない。要塞とは、イザヤ書七章で定義されているとおり、その節においては国、あるいは首都、あるいはエジプトの王を指す。

アラムの頭はダマスコ、ダマスコの頭はレツィン。六十五年のうちにエフライムは打ち砕かれて、もはや民ではなくなる。エフライムの頭はサマリヤ、サマリヤの頭はレマリヤの子。もしあなたがたが信じなければ、必ず堅く立つことはできない。イザヤ書7:8、9

ダニエル書第十一章十節において、北の王はエジプトの国境にまで進み来たり、その節はこれをエジプト（南の王）の「要害」と定めている。十節は、一九八九年、ソビエト連邦が教皇制とその代理軍であるアメリカ合衆国によって一掃された時を表していることが示され得る。これは三つの代理戦争の最初のものであり、最終的には第三の代理戦争（パニウム）において第三次世界大戦となる。第二の代理戦争は十一節と十二節によって表されており、いまウクライナにおいて進行中である。そこではロシアが南の王を表しており、それは一九八九年の敗北においてソビエト連邦が南の王を表していたのと同様である。

私はこれまで、「冷戦」という表現を用いて、これら三つの代理戦争と世界大戦とを区別してきた。実際には、ウクライナでは真の戦闘が行われているのであり、厳密には冷戦ではないが、それは教皇制とその同盟諸国とロシアとの間の代理戦争である。しかし、事実上あらゆる国が標的と見なされる第三次世界大戦が起こることになっている。

ああ、神の民に、今やほとんど偶像崇拜に陥っている何千もの都市に滅びが迫っているという自覚があればよいのに！……

「不法はほとんど極みに達した。混乱が世界を満たし、間もなく大いなる恐怖が人類に臨もうとしている。終わりは非常に近い。真理を知る私たちは、間もなく世界に圧倒的な驚きとして突然押し寄せる事態に備えるべきである。」レビュー・アンド・ヘラルド、1903年9月10日。

第十一節と第十二節において、南の王であるロシアは、ウクライナの戦争遂行を指揮しているナチ政権によって表される教皇制の代理軍を打ち破るであろう。そしてその代理軍は、教皇制の以前の代理軍であるアメリカ合衆国によって支えられている。第二次世界大戦において、共産主義ロシアに対する北の王たる教皇制の代理軍はドイツのナチ政権であり、その代理軍は敗北した。そして、近い将来ウクライナにおいて再び敗北することになる。

第三の代理戦争は第十三節から第十五節において表されており、古代史においてはパニウムの戦いによって成就した。第三の代理戦争は、教皇制の代理軍であるアメリカ合衆国によって遂行され、北の王は、その最初の代理戦争（冷戦）においてそうであったように、その戦いにおいて無神論に対して勝利するであろう。第一および第三の代理戦争において、北の王—教皇制—は南の王（ソビエト連邦）を打ち破り、そののち国際連合を打ち破る。これら二つの戦いにおけるその代理軍は、アメリカ合衆国であり、また再びそうなるのである。

プーチンがウクライナにおいて勝利した後、トランプは第八の大統領として再選されるであろう。すなわち、1989年に最初の代理戦争（冷戦）が成就して以来、アメリカ合衆国において統治してきた七人の大統領のうちの第八の大統領である。1989年は、第三天使の改革運動にとって終わりの時であった。トランプは地の獣にある共和党の角を表しており、2020年には「ウォーク」無神論という獣の手によって致命的な傷を受けたが、これは黙示録第十一章における二人の証人が大通りで殺されることの成就であった。

Future for America は、同じ歴史的局面において真のプロテスタントの角を表す存在であり、2020年には「woke」無神論という獣の手によって致命的な傷を受けた。2001年から22年後の2023年、ミカエルが降臨し、エゼキエル、ヨハネ、ダニエル、イザヤによって表された、間もなく到来する日曜法において旗印として掲げられる強大な軍勢をよみがえらせる過程を開始した。

1856年、フィラデルフィア的ミラー派運動はラオデキヤ的ミラー派運動へと移行し、その時その場で「七つの時」に関する増し加わった知識を拒絶し、さらに1863年においてその反逆を完全に確定した。ミラー派は、第六の教会であるフィラデルフィアによって表される状態から、第七の教会の経験へと移行したのであり、その転換点は、Future for

America のラオデキヤ的運動が第七の教会の経験から再び第六の教会フィラデルフィアの経験へと移行する2023年の歴史と一致している。この預言的適用において、真のプロテスタントの角は、共和党の角と同様に、七つのうちから出た第八のものとなる。

ウクライナ戦争が第二の代理戦争であることを認識する鍵は、第十節と第七節の「要害」にある。第七節において、すなわち教皇権が1798年に致命的な傷を受けたことを表している箇所では、南の王が北の王の「要害」に入り込んだのであり、これはナポレオンの将軍がヴァチカンに入り、教皇を捕虜として連れ去ったことによって成就した。南の王はその要害に入り込んだのである。第十節においては、教皇権およびその代理軍であるアメリカ合衆国を表す北の王が、ソビエト連邦の構造を押し流したが、「要害」は立ったまま残された。この「要害」とは頭部、すなわち首都であり、それはロシアであった。

しかし「頭」すなわち「要塞」は、イザヤ書7章7節と8節を用いて、二人または三人の証人によってのみ確立されうる。イザヤ書7章8節と9節は、1856年に発表されたヒラム・エドソンの「七つの時」に関する連載記事の主要な拠り所であった。現在のウクライナ戦争においてロシアが優勢な要塞であることを立証する二つの節は、イスラエルの北王国と南王国の双方に対する「七つの時」の起点をも確定する二つの節でもある。11章10節は外的な幻を示しており、ホワイ姉妹はそれが諸王国の興亡に基づくと教えている。

「ダニエル書と黙示録に明らかに示されている諸国の興亡から、私たちは、外面的で世俗的な栄光がいかに無価値であるかを学ぶ必要がある。バビロンは、その後この世界が二度と目にしなかったような権勢と壮麗さ-当時の人々にはきわめて確固として永続するかに見えたその権勢と壮麗さ-を備えていたが、なんと完全に過ぎ去ってしまったことか！『草の花』のように、それは滅び去ったのである（ヤコブ1:10）。同様にメド・ペルシャの王国、そしてギリシアとローマの諸王国も滅び去った。そして、神を基としないものはすべて同じように滅びる。神のご計画に結びつき、その御性質を表すものだけが存続しうる。この世界が知る真に不動のものは、ただ神の原則のみである。」『預言者と王』548ページ。

三つの代理戦争は「ダニエル書とヨハネの黙示録の書のうちに明らかに示されて」おり、この真理の鍵は、ダニエル書十一章十節の「要塞」にある。しかし十節はまた内的幻にも言及している。なぜなら、両方の「七つの時」の起点もまた、イザヤ書七章八節と九節において特定されているからである。外的なものとの内的なものとは切り離すことができず、二つの二千五百年の期間はまたエゼキエルの二本の棒でもあり、それらが一つに結ばれるとき、十四万四千人の印を押されることを表し、これは神性と人性との結合である。

ダニエルが因果的な「マラー」の幻を経験したことは、ミカエルが降下して終わりの日の御自分の民を復活させる預言の線を表している。その復活は、キリストが御自身の神性を終わりの日の御自分の民の人性と結合されるために成し遂げられる諸段階を表している。それは、神の御心と人の心との結合によって、彼らが一つの思いを持つようになることによって成し遂げられるのであり、またそれは、魂の「砦」（fortress）である「城塞」（citadel）であるとシスター・ホワイが示している至聖所の玉座の間において成し遂げられる。

御座の間で、神の終末の民はキリストの思いを受け、天上でキリストと共に座するようになる。キリストが座しておられる天の場所は、要塞、すなわち神殿の頭部である。体という神殿には、低い性質、すなわち肉、すなわち体があり、また、高い性質、すなわち思いもある。ダニエル書11章10節において、外的な幻の要塞を示す鍵は、内的な幻の要塞もまた示しており、そしてそれによって、共和主義の角とプロテスタンティズムの角が、獣の像（共和主義）あるいは神の像（真のプロテスタンティズム）へと移行していく歴史を特定する。そのとき、両方の角は七つに属する八番目となる。

それゆえ、プロテスタンティズムの真の角は、エゼキエル力ある軍勢であり、また獣の像に対する戦いにおいて、まずアメリカ合衆国において、次いで世界において掲げられるイザヤの旗であるフィラデルフィアの角である。ダニエル書第十一章十節は、棒の結合が始まる聖なる歴史上の時点を特定している。ウクライナ戦争は2014年に始まったが、ロシアがウクライナへの侵攻を開始したのは2022年になってからであった。2001年から二十二年後の2023年に、ミカエルは、2020年に十人のおとめのたとえの成就において最初の失望を味わった者たちを復活させる御業を開始された。彼はまず、今や荒野で叫んでいる一つの「声」を起こされた。2023年7月、その声は叫び始めたのであり、それは1989年に第三天使の改革運動の初めに起こされたのと同じ声であった。なぜなら、イエスは常に終わりを初めによって例証されるからである。

荒野で叫ぶ「声」は、人性と神性との結合がイエス・キリストの黙示として表されている黙示録第一章を提示することによって、鳴り響き始めた。その黙示は、恩恵期間が閉じる直前に開かれる黙示である。ダニエルは第十章において、「使役的」幻のうちにその黙示を経験した。黙示録冒頭の数節における人性と神性との結合は、初出の原則に基づく最も重要な真理を表している。十四万四千人の印すること、すなわち人性と神性との結合は、神の御言葉によって成し遂げられる。その御言葉は父から子に与えられ、子はそれを御使いに与え、次いで御使いはその使命を人間の代表者に与える。最初の二つの段階は神性によって表される。それら二つの段階は、神性の第二の段階が万物を創造した神性を表しているという特質を有している。次の二つの段階は神の被造物によって表される。第一の段階は墮落していない御使いであり、神の創造の第二の現れは、自らの種類にしたがって再創造する力を与えられていた存在であった。そしてその第四の段階、すなわち人性を表すものは、その使命を受け取り、それを諸教会に送るのであり、それは諸教会が、そこに記されていることを「読み、また聞く」ためであった。

次の記事でこの研究を続けます。

イエス・キリストの啓示。これは、間もなく起こるべき事柄をその僕たちに示すために、神が彼にお与えになったものである。神はそれを御使いを通して、その僕ヨハネに送り、示された。彼は神の言葉とイエス・キリストの証しと、見たすべての事について証言した。この預言のことばを読む者と、これを聞き、そこに書かれていることを守る者たちは幸いである。時が近いからである。アジアにある七つの教会へ。今おられ、かつておられ、やがて来られる方から、またその御座の前におられる七つの御霊から、あなたがたに恵みと平安があるように。さらに、忠実な証人、死者の中から最初によみがえった方、地上の王たちの支配者であるイエス・キリストから。私たちが愛し、ご自分の血によって私たちが罪から洗い清め、そして、私たちが神、すなわち

その御父に仕える王また祭司としてくださった方に、栄光と支配が世々限りなくあるように。アーメン。見よ、彼は雲に乗って来られる。すべての目は彼を見る。彼を刺し通した者たちも見る。地上のあらゆる部族は、彼のゆえに嘆き悲しむであろう。しかり、アーメン。「わたしはアルファでありオメガである。始めであり終わりである」と、今おられ、かつておられ、やがて来られる、全能者なる主は言われる。私ヨハネは、あなたがたの兄弟であり、イエス・キリストにある苦難と御国と忍耐においてあなたがたと共にある者であるが、神の言葉とイエス・キリストの証しのために、パトモスと呼ばれる島にいた。私は主の日に御霊にあって、背後にラツパのような大きな声を聞いた。こう言うのである。「わたしはアルファでありオメガである。最初であり最後である。あなたがたを見ることを書物に記し、アジアにある七つの教会に送りなさい。エペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルディス、フィラデルフィア、ラオディキアへ。」